随筆

Technology 幻想

新津　靖*

Technology — 科学技術 — を分けますと，わたしは次の三つになると思います．第1は technology for better living — 楽しく，安楽に生活して行くための技術，衣食住や便利な省力機などを開発するための科学技術です．工学はこれらの中に集合する自然現象の普遍性を発見して，一定の秩序を与え，人間の better living に役立てようとするものでしょう．

第2は technology for longer life。どうしたら健康と長命を保てるかに関する技術です．もちろん第1の衣食住とも関連しますが，ここではあらゆるスポーツ用具から，冷暖房，公害防止技術，薬品，医療技術などを抜き出します．

第3は technology for eternal life—永生不死のための技術です．こんな言葉はわたしの作ったもので通用しませんが，第1も第2も，実はこの第3技術への目的であり，手段だと思うのです．

その根拠はこうです．

われわれの祖先は，原始の昔から，その時代の人々が全知全能を傾けて作った全くバカバカしいとさえ思える巨大な建造物を残して消えて行きました．それは墓や寺院や神殿です．古来，どこの国でも，時の権力者は大きな宮殿を作らせて，自分に権威を与えようとしましたが，しかし墓や神殿の壮大さには及びません．ピラミッド，ナイル上流の「王家の谷」の墓群，バーミアンの大石仏，セントピエトロ寺院，ノートルダム寺院，アンコールワット，ガテマラのインカの神殿，日本では仁徳陵や大仏殿など，例は沢山あげられます．

わたしはこれを eternal life の technology と呼ぶのですが，哲学者の中井正一は，「こんな愚劣な巨大なものを作った彼等の頭の愚劣さもまた巨大であった」と書いていますが，それは違うのではないか？　わたしはピラミッドの中の玄室まで腰をかがめて急勾配を登っている時にフと考えたことでした．わたしはこれを「ある情念」の満足のための技術と見るのです．なるほど愚劣な技術かも知れませんが，その情念の強さにおいては，今も昔も少しも違わないと思うのです．ただその情念の表現の方向が違うだけだと思うのです．

その情念とは，絶対に死にたくない，永生不死でいたいという情念です．第1も，第2も，この第3のための底辺技術だと思うのですが，古代のどこの国の人々も，淋しく恐ろしい死というものは無いものだと，自分自身に言い聞かせ，納得しようと苦心惨憺した記録の一つが墓であり，寺社だと思うのです．

有史以来，永世不死を願って最大のエネルギを傾注したのは，古代エジプト人と中国人だと思います．自分の死体をミイラにして形骸を残し，墓に入れれば再び生き返えるのだと信じました．王の巨大な墓ばかりでなく，カイロの Ghost 区と呼ばれるところには，庶民のミイラを入れた横穴が沢山残っていて，貧富を問わず，生還を念じた人間の情念をあらためて考えさせられました．また中国人は仙術を信じ，血眼で薬草，薬物を探し求めましたし，インドでは，不変の実体はないが，生れ変わるのだという輪廻（りんね）転生（てんしょう）説が信じられました．往生といい彼岸というも，生と死の連続交代を思っての発想でしょう．またキリスト教徒は，キリストの遺体が3日目に消え失せたことから復活を信じました．

こうした庶民の素朴な心情は，物によって表現するしかありません．その情念の結晶が，巨大な墓や寺院となり，絵画，彫刻という tech-

* 大阪大学名誉教授　三洋電機顧問

nology で表現されたのだと思います．

戦後，一部の学者は，大仏なんてバカげたものを作ったのは，時の権力者の大衆搾取だといいましたが，素人のわたしは，大仏建立に選ばれて参加したことによって，成仏の歓喜を味わった大勢の職人，庶民もいただろうと思うのです．それは今日でも，新興宗教に入信し，その喜捨，奉仕によって，またしても巨大な寺院や神殿が建立されているからです．

歴史の正しい認識は，その時代の背景をなす社会環境と時代思潮の理解から出発すべきだと思うのです．1753年に避雷針を発明したベンジャミン・フランクリンの日記を見ますと，「夏，コップに冷たい井戸水を入れると，コップの外側に露ができる．一体この水はどこから来たのか？」と書いてあります．われわれは今，これをバカだと笑うことができるでしょうか．ウイルス・キャリアによって，冷却脱湿すなわち今日の空気調和技術が誕生したのは，それから約150年後の1902年のことですから……．疑問や好奇は生への technology の出発点です．

さて，人間だけに，不思議な eternal life という情念を抱かせ，恐らく時の最高知能を結集して，あの巨大な建造物を作らせたものは何でしょうか？

この地球上には3552種類の哺乳動物がおりますが，自分の運命を自覚するものは人間だけです．意識する，しないにかかわらず，身体と精神の全機能は，生命の保全とその延長に向って作動しています．だから生物なのですが，「死の自覚」という人間だけの精神的特性は，われわれ人間をどういう心理状態におき，どういう行動をとらせるかを考えてみました．実は大脳生理学，心理学，分子生物学，動物学，更に宗教や歴史の本の第1ページに，このことを書いてくれないのがわたしの不満なのです．

人間の日常の意識活動は，海面に見える氷山の一角であって，大部分は海中に沈潜し，意識されない深層心理です．そしてこの無意識の中にあるものは，すべて表面に浮上して現われることを欲しているのです．従ってその深層心理の基盤に「死の認識」という条件を置いてみますと，人間独特の心理や行動が理解できるはずだというのがわたしの発想です．人間は絶えざる不安におびやかされているとフロイトは指摘しましたが，その源泉は死の不安だと思います．死期の不明，孤独な臨終，肉体的苦痛への恐怖，さらに死後の世界への疑惑に悩む人もいると思います．実はこの不安こそが，人間をして，文化動物に仕立てたのです―自分の食料を農耕，飼育によって自給することも，人間だけの特性なので，文化を culture と呼ぶことはご承知の通りですが……．これがまた人間を環境破壊動物にしました．そしてさらに形而上学的動物，殺人動物，自殺動物にしたのだと思うのです．死を知らない犬猫は，時々刻々の生しか知らず，明日の運命への関知は彼等には全くありませんし，従って自殺もしません．

一体人間はいつから自分の死を自覚するようになったのか？考古学の本に，フランスのムスティユの洞窟で発見された約10万年前のネアンデルタール人の化石に，明らかに埋葬されたとみられるものがあって，「これは人間が作った最初の墓だろう」と書いてありました．墓を作りたいと思う意識は，死の自覚がこの時から起こり，そしてこの時から本当の人間に進化したのだと思いました．そして「人間性」という心理の原点は，ここからだろうとも想像しました．

さて人生とは，人が生きて行く行程，すなわち死に抵抗し続ける期間，いずれ来る死を一刻でも後へ押しのけようと悪戦苦闘する期間だと思います．そのための最大最高の知能を振り絞る期間でもあります．この最も深刻な，抜き差しならぬ危機の到来をどうしてはねのけようか，ここに人間独特の試行，模索，観察，好奇，猜疑，冒険，競争，想像，空想，幻想……などという思考や行動が起こるのだと思います．これらを陰で操り，人間を踊らせるものは，最終的には eternal life への強烈な願望と，それを満たしたいと苦しむ欲求不満，frustration だと思うのです．わたしはこれを情念と呼びました．

まず幼児の，全く無意義，無目的と見える遊びは，生きて行かねばならぬその環境に適応しようとする試行と模索行動です．小学校へ行って絵がかけるようになった時，彼等がかく自由

画は，まず彼等の欲しいと思うものをかきます．これらは「遊び」ですが，これによって子供らしい欲求不満を解消しようとする楽しく快い行動なのです．古代人が洞窟の壁に残した野獣の絵は，食欲を十分に満たしたいという欲求からであって，子供の絵と同じです．大人になってからのすべての遊び，スポーツ，ゲームも同様です．少なくともゲームに熱中している間は，浮世の憂さ—生きる苦しみは忘れますし，その陰に，与えられたそのゲームの条件—その環境—への適応の模索の楽しさが隠れています．孔子も「楽しみによって憂いを消す」といいました．

さて強い欲求不満が起こりますと，また強い想像，空想も起こります．例えば飢餓状態では，豊富な食物の空想が意識を占領するでしょう．実にこの人間だけの空想や像想力こそが，文化創造の原動力であって，人間という文化動物ができたのです．「あらゆる芸術活動は Eros への欲求不満のはけ口だ」といったフロイトの有名な言葉はご承知の通りですが，芸術は幻想世界に遊ぶ美意識であり，情緒的，analog 的であるのに対し，自然科学や技術は，感情移入の許されぬ知的，digital 的世界での探求意識からだと思います．そして，technology には学芸という広い意味もありますので，わたしは機械も建築も，絵も詩も歌も，人間が生きようとする潜在意識から生れる technology だと思うのです．簡単に申しますと，快は生命の延長の喜びに，不快，不安は死への接近信号だと考えてよいでしょう．

さて生命の有限を自覚すればするほど，無限絶対のものに自分を結びつけて，有限なるが故の不安から逃れたいと思うでしょう．その結果，無限，絶対で，しかも人間を加護する慈霊，慈神，そしてまたその対立依存としての悪霊，悪魔という空想と幻想からなる複合イメージが生れ，これへの尊崇と畏怖，此が世界中どこの民族にもある原初的，土俗的な自然宗教だと思います．

考えて見ますと，有限なものを無限にしたいという無理無体な情念が，人間を地上最も強欲で egoistic な動物にしたのですが，実はこれこそが人間の生き甲斐というものであって，善でもなく，悪でもなく，運命の自覚を持つ人間だけの，生きて行くための必要条件だと思うのです．しかし重要なことは，これが決して十分条件ではないという点です．

強欲とエゴの暴走がどういう結末になるか，これに猜疑と競争心が作用して，人間に有史以来，実に15,000回もの戦闘，戦争をさせ，今なお止めない殺人動物にしたのです．他の動物は同類だけは，追い詰めて殺すことをしません．個人のエゴによる専制政治や，衆団欲から起こる戦争によって，悲惨な社会混乱が起こり，大衆が生死の不安にかり立てられた時，釈迦や孔子，モーゼ，キリスト，マホメッドという大思想家が現われて，安心立命と解脱の方法を説き，人間の浅ましいこの欲望に歯止めをかけようとした—これが各々特徴のある教義，戒律であり，生の依るところ，死の帰するところ，永遠で不変な，宗（旨）とすべき教えを—先程の十分条件として示しました．これが彼等の創唱宗教だと思います．そして宗教はいずれも「個人と衆団の哲学」であり，人間の「生への執着の絶叫」である点では，万教同根だと思うのです．

さて，現代人の情念はどんな方向に向かっているのでしょうか？　神に代わって，何を信頼しているのでしょうか？ technology には信頼性というものが必要ですが，ワシントン・ポスト紙にのった「現代のアメリカ人は何を最も信頼性が高いと思うか」というアンケートを見て，実は笑ってしまいました．日本人のわたしにも適用できるからです．16項目ばかりありますが，抜き書きしますと，1位は医学，2位は銀行，3位科学技術，4位軍事力，5位教育，6位宗教……14位は新聞記事，TV，週刊誌，15位は政治家の演説，最下位は広告の文句という順です．上の順序を，世俗的に，「何を頼りにして生きているか」と言い代えますと，まず健康，金，生活用品，腕力，知恵，信念……政治屋はハッタリ，広告はウソ……わかります．何はなくともまず健康，これは永生不死？への第一歩．そのための technology こそ本命です．

ご承知のように，アメリカには九つの巨大な民間研究所がありまして，先頃「近未来の科学技術の予測」というのが発表されましたが，狙

うところがほとんど同じなことに驚きました

それは生命科学, life science の開発研究です. 永世不死科学？です. わが国でも最近生体工学の基礎研究という巨大科学の推進が学術会議で提案されましたが, 老化の防止, ガン撲滅, 生物工学の開発, 応用などです. 環境工学と共に longer life の technology です.

ここでは Rand Corporation のものを挙げましょう. 1983年までに, 人間の性格を変える薬品が発明されるだろうといい, 1989年までには, 微生物のような人工生命が創造されるだろうといいます. 1994年頃ビールスとバクテリアに対する化学薬品の発明, 1998年には脳への情報直接注入装置, 2000年までには遺伝的欠陥を無くす薬品の発明, 2012年には知能を増す薬品の発明—ここで初めて「バカにつける薬」が発明されるのですが, 残念ながら, わたしにはとても間に合わないのです. 2025年に老衰の化学的制御, 2026年には長時間睡眠可能となる……というのです.

technology は死を自覚するために悩む人間の泣きどころ, すなわち永世不死への情念であり, それは目指す方向が違うだけで, 今も昔も変わりません.

昔の聖賢は, 神の名による戒律によって, 人間のこの果てしない欲望, 情念に歯止めをかけました. 現代人は薬品によって, 遺伝子を加工するという technology で, この強欲な人間を永生不死に向って改造しようとするのでしょうか？

人間の生への執着のすざまじい情念！ それ故にまた空想, 幻想の楽しさ！

ここまで読んで下さった方に感謝します.